固定的な性別役割分担（意識）を考える

性別にとらわれず個性と能力を発揮できる社会へ

問い合わせ　人権・男女共生課　☎38-2023

「固定的性別役割分担意識」とは

「イクメン・カジメン」「女性活躍推進」という言葉は、今ではすっかりお馴染みになりました。でも「男は仕事・女は家庭」「夫は外で働き・妻は家庭を守るべきである」などの考え方は、日本にまだ根強く残っています。

実際に６歳未満の子どもを持つ夫婦の家事・育児の関連時間（週全体平均）に関する世界比較をデータで見ると、「子育てがしやすい国」として有名なスウェーデンでは、妻と夫の家事・育児に関する時間に大きな差がないのに対し、日本では圧倒的に妻の方が家事・育児に時間を使っており、夫との間に大きな差があります。

このように私たちの意識の中で長い時間をかけて形作られた性別に基づく考え方を「固定的性別役割分担意識」と言います。

「女性だから料理が上手じゃないと」「男性だからしっかり稼いでこないと」そんな「女だから」「男だから」と、性別によって役割や責任を分担するのが当然と考えることが無意識のうちに自分や他人の可能性を制限してしまっているのではないのでしょうか。

「固定的性別役割分担意識」を見直してみよう

性別に関係なく誰もが自分らしく生きられるように、それぞれの個性と能力を発揮できる「男女共同参画社会」を実現するためには、この「固定的性別役割分担意識」を一人ひとりが見直す必要があります。

共働き世帯が増加する中、仕事や家事・育児、地域活動や防災対策など、今まで以上に広い分野で、性別にかかわらず男性と女性が共に協力し合うことが求められています。

また、「固定的性別役割分担意識」を見直すことは、女性が充実したライフプランやキャリアプランを築くことを可能にするだけではなく、男性自身が感じる「一家を経済的に支える大黒柱たるべき」というプレッシャーを取り除き、「仕事一筋」以外の生き方の選択肢を広げることにつながります。

無意識のうちに自分自身や他人の可能性を制限してしまわないために、性別に基づく固定的な考え方を少しずつ見直していきましょう。

性別にとらわれることなくイキイキと活躍する皆さんへインタビュー

やりたいことがあるならチャレンジ

ひとりで一から不動産スタイリングの会社を立ち上げた２児の母

起業家：矢野万里絵さん

子育てに充実した日々を送っていましたが、“半径５㎞の世界で生きている自分”が「もったいない」と思うようになり、芦屋市商工会創業塾の学びをきっかけに、芦屋リジューム（※P3右上参照）やLED関西のチャレンジを経て、少しずつ起業へのイメージを現実のものにしていきました。
専業主婦期間が長かったので、仕事を始めた時は不安もありましたが、家の外でも使命を持つことで、以前よりもバランスよく家庭を大切にできるようになり、自分のペースで仕事に取り組んでいきました。

女性は結婚や出産、育児、介護など家庭内の役割と社会的な働き方の間で迷うことも多いと思います。でも、何かやりたいことがあるならチャレンジするべきです。
等身大の自分で小さな一歩を踏み出せば、道は拓けていくと思います。

子育てに父親も母親も関係ない

現在、１歳10カ月と５カ月の２児の父親として育児に奮闘中

イクメンパパ：勝部尚樹さん

まさか自分が育児休業を取るなんて思っていませんでした。
でも夫婦で育児について話し合う中で、「仕事はこれから何十年もしていくけど、育児休業は今しか取ることができない」と思い職場復帰する妻と交代で取得しました。
いざ家事・育児を第一責任者としてやってみると、その気になればできるんだと思いました。困ったことといえば、公園に行っても、なかなかママ友ができないんですよ(笑)父親同士で気軽に意見交換ができる場も大事だと思います。

まだまだ男性の育児休業の取得率は低いですが、子育てに父親も母親も関係ないと思います。男性も子どもの成長過程に関わることがあたりまえの社会になれば良いと思います。